

町中に演劇ポスターが貼られたテハノの演劇祭へ。「何でもアリ」な姿勢に大共感。

韓日アートフェスティバル
(KOREAS&JAPAN ART FESTIVAL)

OM-2



韓日アートフェスティバルに参加のため、行ってきましたソウル。日本からは和太鼓倭、ゴキブリコンビナート、冴子、Abe M Aria、ユン・ジョンヒ(枇杷系)、OM-2が参加。韓国からは、ダンスグループありパフォーマンスあり伝統舞師あり(チマチヨゴリを着ていたからそう思っただけかもしれない)の豊富なラインナップ。このフェスティバル、5日間開催されて1日に1グループ30分くらいの演目を6~8本も見ることが出来るというお得なもの。日本ではあんまり無いんじゃないですかね、日舞とノイズっぽい「ギーコッ、ギーコッ」っていう音を使うグループが順番に出演するイベントは、それだけ、見る側も出演する側も懐が深いのかな...と期待。そういうのに触れると、ダンスのフェスティバ

ルでもヒップホップとか日舞とかタップとかどどん雑多になってもいいのになど感じます。そうやって「なんでもあり」みたいに、みんなで選択していけば、逆に似たモノ(作品)が無くなっていくんじゃないかなと。会場はサダリアートセンターという改装(新築?)ホヤホヤの劇場。どれくらいホヤホヤかと言うと、到着した時にはまだ楽屋のトイレが取り付けの真っ最中だったとの事。ついでに上手側の奥の非常階段は最後まで付きませんでしたけど。(工事の気配は常にどこかしらにあった)「おおらかな国だなあ。これが「これがケンチャノ精神か...」(「大丈夫、大丈夫。あんまり気にするな。みたいな感じの意味らしい)まあでも、劇場の空間は広いし、天井高もけ。こうあるし、階段状になった座席(約300席)も簡単に取っ払ってフラットにもできるしで、とても使い勝手の良いスペースです。わたしたちの参加したイベントは5階にあるスペースで行われたのですが下の階も劇場になっていて(2フロア分を使用した劇場になっている)そこでは「ロックミュージカル ロミオとジュリエット」をやりました。今ソウルでは「ロミオとジュリエット」と「ハムレット」を現代風にしてやるのが流行らしい。サダリアートセンターはソウルのテハノと言う場所にあります。このテハノは劇場街で、そこいら中に劇場があります。大通りを歩いていると公演の告知専用の掲示板(ガラスケースの中にポスターを貼れるようになってい)がちよこちよこあって、ああこれは演劇

とかの公演が馴染んでる町なんだなと感じました。さらに夕方の開演前の時間帯になってくると、駅近くのベンチやら歩道やらにポスターやらチラシがバシバシ貼り廻されてました。東京ではそんな風に町中に貼ったりできないですからね。そんな町の雰囲気は、うらやましいなと思いました。

OM-2の「パフォーマンスNo.1」という作品は、11日と12日の2ステージだけの予定だった(フェスティバルは11日8~11日13日開催された)のですが、韓国側プロデューサーが気に入ってくれて「13日もお願いできないか...」という言葉に、メンバー一同「ケンチャノ」と応えました。最終日に観るつもりになっていた韓国のパフォーマンスを結局は観られなかったのがやや残念でした。でも、その後打ち上げがありまして、そこで聞いた所によりますと彼らはちよこちよこ東京に来たりする事もあるらしいのでその際には是非にと思っております。うーん、なんか交流したなあ、焼き肉食べて焼酎飲んだだけなのかもしれないけど。ちなみにユンさんとAbeさんは韓国のミュージシャン宇宙天王と意気投合し、いつかコラボしようと思っておりました。酔っ払ってましたけど。

最終日、観光でもしてみようかとホテルの近くの世界遺産に行ってみたのですが、月曜日なので閉まっていた。(中井尋央/OM-2 併優)



冴子

アメリカは今、何処へ行く?北米の最新戯曲を翻訳し、言語・思想における交流を掘り下げる。

東京国際芸術祭 2006
アメリカ現代戯曲&劇作家シリーズ Vol.1
2月10日~12日 にしすがも創造舎

私が渡米したのは、91年の夏、日本でもアーツ・マネジメントに関する認識が高まりはじめ、学科が開設されはじめた頃でした。ニューヨーク市立大学の修士課程でパフォーマンス・アーツ・マネジメントのセオリーと実践を学び、卒業後3年間をニューヨークで過ごし、その後ロサンゼルスに移り、日米文化会館に5年半勤務し、日本のアーティストの招聘ツアーを担当しました。そして2002年の3月から、米国中西部最北の地方都市、ミネアポリスに移り、米国に6つあ

るリージョナル・アーツ・オーガニゼーション(RAO)の一つ、アーツ・ミッド・ウェストで日米カルチュラル・トレード・ネットワークという日米芸術交流プログラムを担当しています。学生時代のインターンも含めると15年の間、北米のNPOで仕事をしてきたことになりました。「アーツ・マネジメントで留学した人は多いけど、卒業してからもずっと残って仕事する人は殆どいないんだよ。アメリカによっぽど好きな人がいるんだな」と、東京国際芸術祭(TIF)のディレクター、市村作知雄氏からは、独特のコメントをいただくのですが、私が北米に留まって仕事をしてきたのは、ノンプロフィット・アーツ・セクターのネットワークとSynergy(シナジー)に支えられてきたからだと思います。(さすがに仕事だけでもないですが) Synergyというのは、一言で日本語に訳しにくいのですが、「共同作業の際に相生じる互扶助的エネルギー」です。これが仕事や生活の原動力になってきました。また、米国のこの業界の小さな失敗にこだわらない明るさやおおらかさも、型にはまるのが嫌いな私の性格にあっていたようです。日本の25倍という広大な国土を持ち、様々な文化的背景を持つ人々が築いてきた米社会ならではの文化ですが、91年やイラク戦争以降、こうしたアメリカ社会のポジティブな面

が影をひそめ、保守化、内向化しているのはとても残念です。

さて、現在進行中のプロジェクトは、TIFとの共催で、北米の最新戯曲を翻訳し、日本の演出家、ドラマツルクを交えて練り上げ、本格的なステージ・リーディングを行うというものです。音楽やダンスに比べ、演劇、特に現代演劇は言葉の壁の問題からこれまであまり活発な交流がなされてきませんでした。しかし、聴覚、視覚、触覚を中心とした芸術交流だけではなく、言語と思想を深く掘り下げた交流することは、グローバルゼーションや、世界各地の戦争や貧困を含む社会問題が急進する現在、新たな必要性と可能性を持っていると思います。このコンセプトは、TIFの市村氏や米国側のパートナーであるミネアポリスのプレイライツ・センターとガスリー・シアターのディレクター達ともまさに、一を話せば十まで通じ、例のSynergyが発生します。また、このプロジェクトは一回限りでなく、3年に渡って展開し、日本の劇作家もプレイライツ・センターに招聘し、双方で行います。そして、西海岸や東海岸ではなく、北米のハートランドの文化的中心地の一つミネアポリスを長期的な発信地としていくことで、全米各地で日米の現代演劇の交流が活発化すれば、素晴らしいと思います。

来年2月10日~12日、西果鴨の創造舎でのステージ・リーディングには、4本の戯曲の劇作家も来日し、ディスカッションに参加します。興味のある方は是非、お運び下さい。(吉田恭子/日米カルチュラルトレードネットワーク(CTN)ディレクター) ●アメリカ現代戯曲&劇作家シリーズのプログラム詳細はP4をご覧ください。



現代戯曲シリーズの作家 Jordan Harrison Kelly Stuart

CUT IN Vol.46 2006年 1月号 発行/タイニエリス デイ・ブックス ネットワーク・ジャパン 編集部/新宿区富町4-13 03-5366-8646 井上二郎 jjo_@za2.so-net.ne.jp DTP/ORANGE, KOUSUKEGOSAWARA

アンティエ・プフントナー

裸になったら嘘をつくな! 阿責なく現在に迫る ドイツダンスシーンの新世代。

「ドイツのダンス—新しい世代」

05年11月 青山円形劇場

「日本におけるドイツ2005/2006」(通称ドイツ年)にちなんだシリーズ「ドイツのダンス 新世代」、現在ドイツのフリーシーンで活躍する3組が「ダンス」の概念を揺るがす先鋭的な表現を披露した貴重な公演だった。

第一弾コンスタンツァ・マクラス&ドーキーバーク「バック・トゥ・ザ・プレゼント」は、多様な人種や文化が混在する現在のベルリンの状況をそのまま舞台化したような作品(11/4~6)。舞台上にはソファやライトスタンドといった家具が置かれたフラットな雰囲気の中、切なくて惨めだが愛おしいシーンの数々をダンス、歌、演奏、語り等で綴っていく。ビートルズ「イェスタデイ」のボサノバ風バージョンによってシーンの合間に流される映像も、どこかネガティブでトホホな情景ばかりだ。グズグズに泣き崩れながら廃墟を彷徨う下着姿の女性、ゴミ溜めのようなアパートに集いドラッグパーティでバッド・トリップする面々、遊園地で恋人もなく独り笑われてしまう惨めな女性……。そこで描かれるのは「希望に満ちた未来」ではなく、「恥かしくて他人には隠しておきたい古い記憶」の堆積の上にある「現在」である。その先に、居直りとも開き直りともとれるパフォーマンスを繰り返して行く。張りのある見事な歌声を披露しながら男性ダンサーを叩きのめしていく小柄の女性ダンサー。たくさんのぬいぐるみを投げ合っては「ぬいぐるみを投げ合うような舞台にベルリン市は助成してい



コンスタンツァ・マクラス

るんだから、何をしたいわよね」と叫んで、おもむろにクラッカーを頬張りながらロックナンバーを大合唱したり。もちろん曲で砕かれたクラッカーは飲み込まれず、そのまま周囲に飛び散ることになる。メチャクチャという子どもっぽい悪ふざけというか、とにかく開けっぴろげ。日常の雑然とした生活感覚そのままのカオス的パフォーマンスだ。旧東側で廃墟や移民の多いベルリン・クロイツベルク地区でダンスなど見たこともない人たちをも相手に活動するマクラスならではの、現実と真正面から向かい合った傑作だった。

2組目アンティエ・プフントナーはソロ「自分のこだわり」を公演した(11/9~10)。「認められたい」「理解されたい」という自意識の高まりをシニカルに描いた作品で、舞台は白い床と horizontals のホワイトキューブ風の設定。照明はほとんど変えず、客席を見据えながらダンスや身体について問いかけ、さまざまなシーンを綴っていく。自分の身の上を寓話風に語りながら、高度なテクニックとともに動き回る。あるいはロック音楽をBGMにエア・ギターを弾く手が段々と股間へ伸ばされていき、自慰行為を模した動作を繰り返す。また、イスに座ってテーブルの上で手を組み、前を向いたまま数分間じっとしていると、突如テーブルの下から包丁を取り出し、片腕を斬り落とす。実はそれは作り物の腕で、席に着いた時から用意していたものだったのだ。こうしていろいろなネタを披露した後、おもむろに中央に立ち、客席を見渡して会釈をする。「これで終わりか」と思って拍手をすると、またおじぎ。また拍手。「アレ?」と思う東の間、動作がどンドンエスカレートし、ヘッド・バンギング。常に「見る・見られる」関係性を探りつつ、観客の意識に揺さぶりをかけ、裏切っていく。プフントナー本人はいって真面目な優等生タイプの人柄に見えるだけに、そのアンファンテリブル的で確信犯的なパフォーマンスが、より鮮明な印象として残った。

3組目トーマス・レーメン「モノ・サブジェクト」は、終始一貫して舞台上での「真実」や「リアリティ」を問う試みの連続だった(11/12・13)。公演はレーメンが「いま・ここ」について語るどころから始まる。劇場の壁、照明、床などについて説明し、舞台上に置

いてあるサッカー雑誌に載っている試合の結果、スーパーのチラシに載っていた特売のチェンソーを買ったもののこの作品ではまったく使わないこと、そして出演者やスタッフ、セットしてある楽器、アンブについて言及していく。舞台奥の壁には一面にアルミホイルが貼付けてあり、エレキギターの増幅音で震動させる。あるいは「ロック」「ファシズム」「コミュニスト」「ビクトリー」などのシンボリックなサイン(ポーズ)をジョークにしてみせたりする。「ダンス」というよりは「メタ・ダンス」、むしろアート・パフォーマンスに近いかもしれない。「ダンス」的なムーブメントもないではないが、それはダンサーのマリア・クララ・ヴィラ・ロボスが、踊れないレーメンやミュージシャンのガエタン・ブーラーデを相手に、ジャズダンス的な振付指導を戯画化してみせるシーンくらいだ。「舞台上に自分自身の現実をただ提示すること」をコンセプトに創ったパフォーマンスで、ラストには全裸にもなるが、これは「裸になったら嘘をつけない」ということだという(11/12アフタートークより)。

3作品を通して感じられたのは、日本のコンテンポラリーダンスが「コドモ身体の善用」(桜井圭介)だとするならば、現在ドイツのフリーシーンで注目されている様々な試みは「オトナ身体の悪用」ではないのかという印象だった。均整のとれた肉体とトレーニングされたテクニックを持ちながら、それらを従来の「ダンス」として展開するのではなく、むしろ自分たちが普段日常で感じている現実認識として提示する。「メタ・ダンス」とも言える数々の試みから、既存のアートでは満足できない表現への食欲さと、アーティストとしての旺盛なバイタリティを感じずにはいられなかった。

(堤広志/演劇・舞踊ジャーナリスト)

IN TOWN

観客の場所



■12月某日、大田区大岡山駅の商店街の中にある、「山口履物店」と書かれた建物へ行く。なぜ?ここで展覧会「12 Divers at the mountain gate」があるから。山口履物店は数年前まで本当の靴屋さんだったが、オーナー亡きあと、出品作家の小泉伸司がアトリエ兼住居として使っている。3階建ての小さな建物に、3人の作家が出品していた。3階には小泉の映像作品(下の写真)が、薄暗い部屋で流れている。すりガラスに映った姿を、ビデオカメラで映し出す。ぼんやりと、ガサガサした肌触りに見えてしまうヒトカゲは、もしかして靴屋の主人のおもかげかもしれない。映画の映写室で仕事をしているという小泉だからこそ、映像を「見せる」「見る」「映る」「写す」ことに熱心なように感じた。2階にあるのは、増本泰斗の映像作品。暗を感じる小泉の作品とは相反して、増本の映像は観客から笑いが洩れる。おそらく10年ほど前の映像をザッピングしたり、アニメーションに違うナレーションをかぶせている映像作品だ。流れている映像、それについている字幕(英語の映画の字幕だけでなく、「東京 はれ」という天気予報の字幕でさえも)、音、どれを取っても「面白い」と思わせるタイミングで切られ繋げている。モニターの中だけでなく、黒い一人がけのソファや置いてあるリモコンも含めた部屋全体のインсталレーション



がマッチしていた。1階の階段脇には、富井大裕の立体作品が置いてある。おそらくこの店にあったものであろう傘の骨が、天井に伸びるようにつながっている作品だ。同じ素材の連続性で作品を作る富井が、今まで制作してきた数々の作品と重なる。器用に傘の骨が組み合わさり、作品としてユニークさが見え、元のモノを忘れて新しく違うモノに見えてしまう。もしかしたらこの建物の大黒柱なのではないか?と私は思った。玄関でもある1階は、3人の作品が並ぶ。内容も見せ方も全く異なるような、つながらない個々の「点」が、ひとつの「展」を作り出す。小さな「山口履物店」だったが、ひとつひとつの作品の面白さに私はハマった。(藤田千彩)

■12月某日、「バンクムービーコレクション」なる上映会に行く。70年代半ばのイギリスで生まれ、若者の音楽、ファッションを通して大きなムーブメントとなった「バンク」。その本質をバンドのライブ映像やインタビューによって伝えるドキュメンタリーフィルムが一挙に上映された。高い失業率と政治不信。その不満や怒りが爆発したかのような当時のライブ映像にまず圧倒されたが、そこで目に飛び込んでくるのはアーティスト以上にどきどきメイクをし、痙攣するように飛び跳ねる観客の異様な熱狂ぶりだ。音楽に合わせて踊っているというより、自分たちが踊りたいために音楽があるというよりも、自分たちが踊るというよりも、その楽曲も主役ではないように見えた。その音楽自体よりも、それを本当に必要な観客の存在がこれほどまでに強く見えてくるという体験は私がかつてしたことがなかった。とくに恐ろくア

ルバム一枚も残すことが無かったであろう無名なバンドのライブ映像にそれを強く感じる。何よりもステージ上にはアーティスト自身も数ヶ月前までは観客の中の一人であったのだろう。自分が本当に欲しい音楽を自分でつくる。その愚直なまでにストレートな表現こそバンクの魅力に違いない。さて、今の私たちに本当に欲しいものは一体何だろうか。(小笠原幸介)12月2日~9日、吉祥寺パウスシアターにて。

■最近の坂手洋二と燐光群の仕事に考えさせられることが多い。特に実際の事件・事故に取材したドキュメンタリー作品群は、本来ジャーナリズムがやるべき仕事を演劇というメディアでやっているという気がする。英国の劇作家デイヴィッド・ヘア作『パーマメント・ウェイ』(11/20~12/4@シアターラム)もそうだ。国鉄の分割民営化後に続発する数々の列車事故を、当事者たちが様々な立場から語っていく。そこで浮き彫りになるのは、安全性よりも利益が重視され、会社組織が幹部の私欲追求に利用されていく構図。奇しくも05年日本で起こったJR福知山線の脱線事故や、中堅セネコンの耐震強度偽装事件に通じるリアリティがある。だが、現実には起きた事件の再現が演劇の役割だろうかという異見もあるだろう。しかし、にわかには信じがたい事件や事故の真相に迫りながら当事者の切実な声を伝えることは、むしろ演劇の方が有効と思われるのだ。日々細切れの情報をセンセーショナルに量産していく現在のマスコミよりは、ともあれ、JRも含めて鉄道関係者は鉄道本来の理念を勉強し直すべきだ。(堤広志)



CUTIN

アリスフェスティバル2005、終盤戦へ。

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース
 ~「ALICE FESTIVAL 2005」の公演から

ネタバレ厳禁!! 野鳩の問題作? 登場?

野鳩「僕のハートを傷つけないで!!」
 2/4日(土)~7日(火) ◎タイニイアリス



シベリア少女鉄道の役者、吉田友則(吉田つるり)が作・演出をつとめるフレッシュな劇団、白井劇団から「白井暁子」を客演に招いての公演になります。
 <野鳩とは?> 2001年に佐伯さち子、畑田晋事、水谷圭一を中心に結成。読み切りマンガみいたなチームなストーリー、マンガ的でキャッチーな演技、小道

「劇団から本紙へ、ひと言」。今回の作品、内容を説明してしまいますと、すべて「ネタバレ」になってしまいますので、簡単なキーワードを上げるなら「男と男の友情」「切っても切れない絆」という感じでしょうか。ある意味、今までの野鳩作品のなかで最も「問題作」になる可能性の高い作品です。バカバカしすぎて…。

また今回はロリータ男爵から「信長の素」での本番中の落下事故から奇跡の生還を逃れた「加瀬澤拓未」、

がドラマリーディングをする。※日するのは、国際演劇祭での受賞歴も数々、いまイラクでもっとも注目されているミッサール・ガジと、実験劇の最先端を切る若手新進ヤシール・アブデル・ラアザック。作品も、フセイン政権崩壊以後、今を描く「(あたりを)暗くさせる(仮題)」「(ミッサール)」等が現在翻訳されている。さらにパントマイムグループ「モスタヒール」のアナス・アブデル・アジールもマйм作品を披露。俳優でもあるヤシールとともにイラクNowを身体で伝えたいと張り切っている。長い

イラクの「いま」を 言葉と身体を通して伝える。

「イラクNow!!」ドラマリーディング+
アフタートーク+マйм
2月13日(月)~15日(水) ◎タイニイアリス

武装集団と米軍の戦いよいよ激しいバグダッドから劇作家を招き、その作品を翻訳して日本の俳優たち

具や舞台美術によるちょっとおどろく仕掛けが得意。毎回思春期中学生の恋愛や様々な欲望をこしふしぎにお届けする。毎日制服を着ていたあの頃の、甘酸っぱさや切なさが、詠りの効いた方言セリフに乗ってハートに「キュン」と響くような。お菓자에例えるならその懐かしさはまるでチュルシー。二十代後半の人達による大変フレッシュな劇団です。2004年より、日本インターネット演劇大賞・最優秀新人公演を受賞。第14回ガーデン・ガーデン演劇フェスティバルの公開二次審査において審査員全員の満票によりトップで出場権を獲得。「お花畑でつかまえて…」を東京・神戸で上演。

ALICE FESTIVAL

文化的鎖国状態から、いま世界に向かって扉が開かれようとしているイラク、4000年の歴史に日本の60~70年代のような演劇革命が静かに訪れようとしているのかもしれない。長く、豊かな歴史と伝統を受け継ぎながら、自分達の生きている今を、身体と言葉を用いて彼等がどのように表現してくれるのか。是非ご覧いただきたい。

左)ミッサール・ガジ
 中)ヤシール・アブデル・ラアザック
 右)アナス・アブデル・アジール



女性わざ師たちの荒技満載の冒険活劇。

ひげ太夫「南獣トウゲ」 2/1(水)~2/3(金) 19:00
 2/4(土) 14:00 & 19:00 2/5(日) 15:00 @麻布die pratze
 前売¥3000 当日¥3300 問=090-3503-0108(ひげ太夫) 作・演出=吉村やよひ
 出演=吉村やよひ 成田みわ子 みそ 田嶋鶴子 永井ひとみ 林直子

★作・演出の吉村やよひ氏にインタビュー

Q—一体なぜ組み体操を組み始めたのですか?
 A—もともと体を使った芸を出したいって気持ちが強かったんです。旗揚げ当初から椅子を体でやったり、ブリッジして人を馬跳びしたり。それで、もっと新しい芸をやりたいって考えてる時に京劇のチラシに、肩とモモに乗ってる組み体操が載ってて、これやってみようって。今思えば、それ、すごく簡単な組み体操なんですけど。当時は出来て大喜びしてましたね。
 Q—技はどんどん進化してますか?
 A—それはもう。やってみたら意外と出来るんで、楽しくなっちゃって。今は肩の上に人を立たせて歩くのなんて朝飯前です。
 Q—怪我しませんか。
 A—してました。昔は。骨折ったりとか。でも「こりゃいかん」って真剣に技術を学びました。チアリーディング協会の方に安全な着地を習ったり、器械体操の指導員に体の使い方を習ったり。今はもう怪我しなくなりましたね。

Q—ところで、なぜ全員女性なのですか?
 A—若い頃に男女一緒に劇団に出た時に思ったんです。「女は添え物扱いだな。男がメインなんだ」って。女をメインに持ってきた芝居も世の中にはあるけど、旅館を切り盛りとか、女流作家の一生とかで。や、それはそれで面白いとは思ってますけど。要は私、わくわくするような活劇がやりたいんですよ!自分がメインで。だから、ひげ描いて男役って事になっちゃってますね。
 Q—でも女役もやりますよね。
 A—やらないと気がすまないですね。毎回。最近では男役から女役への早変えも慣れたものです。昔はよく「女役の時、ひげがうっすら残ってましたよ」とか言われてましたけどね。
 Q—次回公演では大阪初進出ですね。
 A—もうね、長年の夢でした。東京以外の都市でやるのが。一心寺シアター倶楽のスタッフが、たまたまひげ太夫のホームページを見て「女がひげ描いて、組み体操観。しかも並大抵じゃない力技。何だこりゃ?」

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

って思ったそうで。気になる気になる、と言っていたら、劇場のプロデューサーが「じゃあ、呼んでみれば」とおっしゃったので。嬉しくて涙目になりました。
 Q—その次回作「南獣トウゲ」とは?
 A—一目くらも中華大活劇です。何者かによって、風はよれるわ、空は溶け出すわ、都はえらい事になってるんです。そこに「南獣さま」っていう南の方角を守る神もからんで、帝やら侠客やら屋台のおばちゃんも出てきて、大冒険でどどーん、です。
 Q—「どどーん」てひげ太夫の組み体操では必ず言いますね。
 A—はい。いつの頃からか「どどーん」が決め言葉に。今回もちろん言いますよ。あと、本当は秘密なんですけど、今回の目玉は童です。
 Q—童?
 A—はい。前回公演では竹馬、その前は板を使った芸を編み出したんですが、今回は童です。うちはいつても7人編成ですけど、今回は9人出るんです。それだけでも随分豪華なのが組めるんですけど、さらに童が10人目、11人目のメンバーとして活躍します。皆様の視界一杯に広がる「出し物芸」を出しますから。詳しくは観ていただいのお楽しみ、ということで。
 Q—はい、くれぐれも怪我には気をつけて。
 A—そりゃもう、大丈夫です。ただ、童は新人なので、よく指導しておきます

die pratze dance festival 「ダンスがみたい! 新人シリーズ4」いよいよ開幕!!

「これまでにない舞台を」

今回で4回目の新人シリーズもまた多くの応募があった。6人の実行委員が応募映像をすべて手分けして見て評価し、集まってさらに見ながら協議して出場者を選出した。すでに活躍している人やグループの応募も多く、テクニックもあり全体としてレベルが高い。僕自身、なるべく予断を排して舞台とダンスそのもので審査し、決定に至る基準はオリジナル性を最も重視した。

いまダンスは、すぐスターになれる世界ともいえる。数十名の小ステージで踊っていた人たちが、翌年その何十倍の観客を魅了し、海外公演を行うことも多い。新鮮な発想と意欲がこれまでにない面白い舞台を作っているからだ。地方でも

こういったダンサーやグループを呼んだり、自分たちで作品を作る動きが活発になっている。今回新人賞、オーディエンス賞を設定しているが、観客1人ひとりの見方が大切だろう。僕はこのなかに、必ず観客を惹きつけ、大きく羽ばたく人たちがいると確信している。

ダンスがみたい! 実行委員 志賀信夫(質問批評)

■日程/2006年1月10日~2月1日

■チケット料金等についてはp4スケジュール欄を参照

- 1/10(火) Aグループ
 ・高見知英美 ・若尾伊佐子 ・大西小夜子
- 1/11(水) Bグループ
 ・中村公美 ・りな・りうち ・ねねむ
- 1/12(木) Cグループ
 ・富沢野江 ・幸内未帆 ・09(ゼロキュー)

- 1/14(土) Dグループ
 ・和-yori~ ・KeM-Kamunimaku-Project
 ・KAPPA-TE
- 1/15(日) Eグループ
 ・酒井幸菜 ・お宝。 ・相岸由季
- 1/16(月) Fグループ
 ・妄人文明(ワンニブンメイ) ・横山愛 ・gera?
- 1/27(金) Gグループ
 ・箱入りオブラート ・荒木志水 ・安次磯菜緒
- 1/28(土) Hグループ
 ・林祐司 ・瀧本あきと ・深見章代
- 1/29(日) Iグループ
 ・ノシロナオコ ・東京フラメール ・roco-motion project
- 1/31(火) Jグループ
 ・10°個の粒子の揺らぎ ・maguna-tech ・古龍奈津子
- 2/1(水) Kグループ
 ・瀧田高之(スピロ平太) ・ジュールモンテンキント ・ピンク

アメリカの劇作家はいま、何を考えているのか。

芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.26

東京国際芸術祭2006

「アメリカ現代戯曲&劇作家シリーズVol.1 ドラマリーディング」[日本+アメリカ合衆国] プログラムディレクション:市村作知雄(TIF)、吉田恭子(アーツ・ミッドウエスト)、ボリー・カール(プレイラッツ・センター)、マイケル・ディクソン(ガスリー・シアター) ドラマトルク:長島健

全米から集まった千本近くの新作戯曲から選ばれた、20~50代の劇作家による4作品を、日本の気鋭演出家を読み解く、ドラマリーディング。

◎「メイヘム」MAYHEM (2000) 作:ケリー・スチュアート 翻訳:川島健 演出:宮崎真子(俳優座)

9.11より1年前の夏、あるアメリカ人家庭での出来事。政治にも社会問題にも無縁の主婦が、活動家の友人や、戦場ジャーナリストとの出会いによって、今、世界で起こっている出来事に関心を持ち始める。テレビで流れる戦場からのニュースと、家庭で夫や子どもを抱える閉塞感とのギャップ。その距離を測りかねながら、平和運動への猜疑、メディアで報道される暴力のリアリティの真偽を問う主婦と、それを取り巻く人々の姿が率直に描かれます。

・ケリー・スチュアート Kelly Stuart

スマートで鋭い観点から政治的な問題へ切り込んでいく作風で定評があり、96年「Demonology」でBest New American Play Award(Sun and Moon Press)を受賞。近年では、イギリスのロイヤルコート劇場や、ドイツのシャビューネ劇場などでもリーディング公演が行われている。ニューヨーク在住、コロンビア大学で劇作を指導している。

・宮崎真子 Masako Miyazaki

演出家。俳優座所属。1991-93年文化庁芸術家在外研修員として渡英。R・ルバーゴ、A・エイクボーンに師事。古典から現代劇、オペラまで幅広く、造形美に満ちた斬新な演出を展開。演出作品に「ヒトノカケラ」(新国立劇場)、「アンティゴネ」(シアター・トラム)他多数。最新作は俳優座劇場プロデュース「サマーハウスの夢」。

◎「アクト・ア・レディ ~アメリカ中西部ドラッグショー~ Act A Lady, a mid western drag show in three acts (2005) 作:ジョーダン・ハリソン

翻訳:須藤鈴 演出:江本純子(毛皮族) 1927年、アメリカ中西部の小さな町で、3人の男が派手な女装でモドドラマを演じる。やがて、芝居と現実世界が混同し始め、登場人物の性別の境界線が曖昧になり、それぞれの素顔やアイデンティティが明らかになる。GLBT(ゲイ/レズビアン/バイセクシャル/トランスセクシャル)問題の起源を辿り、男性の中に存在する「女」、女性の中に存在する「男」について問いかける意欲作です。

・ジョーダン・ハリソン Jordan Harrison

1977年生まれ。99年スタンフォード大学(英語学)を卒業後、

ブラウン大学にて劇作を学ぶ。02年より、数々のアワードや奨学金を獲得し04年にはオフ・ブロードウェイ進出。その新作戯曲は全米の劇場でリーディングワークショップが行われている。ミネアポリス在住。

・江本純子 Junko Emoto

1978年生まれ。立教大学在学中の2000年9月に劇団「毛皮族」を旗揚げ、以後全公演において作・演出・出演。主な出演作に映画「恋の門」「下妻物語」「姑獲女の夏」。2005年にはCD「すりガラスの20代」、DVD「毛皮族☆DVD」「銭は君」をリリース、絶賛発売中!

◎「ペラージオ;もしくはメタル製のすべてのもの;もしくはおじいちゃんがババを射殺させるとき~」

BELLAGIO; or Of all Things Made of Metal; or When Grandpapa Had Daddy shot (2005) 作:マック・ウェルマン 翻訳:川島健 演出:

中島諒人 1910年代、近代文明の産業や機械を礼賛し、ファシズムと深く繋がっていたイタリアの「未来派」。主唱者である詩人マリネッティの輝かしいエピソードが羅列される第1幕に続き、第2幕では第二次大戦終了間近の退廃的な雰囲気の中でマリネッティとムッソリーニの食い違いが展開。複雑な時間構造の中で史実とフィクションが絡み合い、当時の未来派の興隆と衰退の様子が、現代資本主義社会の行く末に照射されていきます。

・マック・ウェルマン Mac Wellman

アメリカ現代演劇を牽引する劇作家。1970年代からニューヨークを中心に活動し、これまでに、3度のオビー賞(オフ・ブロードウェイの上演作品を対象にした賞)を受賞、03年には最も榮譽ある、「Lifetime Achievement」を授与される。その作品の数々には、挑発的で痛烈な風刺が込められている。現在、ブルックリン大学にて教鞭をとる。

・中島諒人 Makoto Nakashima

1994年、シアターカンパニー・ジンジャントロブスボイセイを設立。利賀演出家コンクール2003で最優秀演出家賞を受賞。代表作は「かもめ」「ユビュ王」「ヘッター・ガブラー」など。今春より鳥取に活動拠点を移し「鳥の劇場」としてリスタートする。

◎「セックス・ハビッツ・オブ・アメリカンウイメン」

The Sex Habits of American Women (2004) 作:ジュリー・マリー・マイアット 翻訳:吉田恭子 演出:

中野成樹((POOL-5)+フランケンズ) 1950年代前半、性に関して閉鎖的な時代の価値観の中でそれぞれに悩む夫婦と娘のストーリーと、2004年のシングルマザーの母と娘へのインタビューが交錯する。愛、ロマンス、セックス、自己犠牲、欲求の抑圧など、心と身体、個人と家族の奥深い課題、そして女性の性と精神の神秘性が時代を超えて浮かび上がります。



・ジュリー・マリー・マイアット Julie Marie Myatt

ニューヨーク、ロサンゼルス、ミネアポリスの劇場を拠点に活動。「セックス・ハビッツ」は、プレイラッツ・センターにてリーディング上演、ギヤスリー劇場で本公演化された。最新作「Boats On A River」では、同劇場のInternational Travel New Play Commissions(劇作家を世界へ派遣し、その経験を作品に活かすプロジェクト)でカンボジアに滞在、リサーチをもとに作品を書き上げた。

・中野成樹 Shigeki Nakano

1973年東京生まれ。POOL-5所属。98年、自身がリーダーとなる演劇ユニット、フランケンシュタイナーをまったく別口に立ち上げる。2003年、中野成樹(POOL-5)+フランケンズに改名。「フランケン」では一途に翻訳劇をとりあげ、誤意訳なる独自のスタイルで注目をあつめる。

* 出演者はホームページにて発表します。

<TIFオープニングスピーチ>

今年で12回目を迎える東京国際芸術祭の開幕にあたり、ディレクターが各演目の紹介とプログラミングの方向性についてお話しします。(10日(金)15:00の回のチケットをお持ちの方のみご参加いただけます)

<シンポジウム「アメリカの劇作家は今(課題)」>

来日する4人の劇作家を交え、アメリカにおける劇作家の現状と課題をディスカッションします。(チケットをお持ちの方は入場無料、シンポジウムのみ参加の場合は500円(予約不要))

■料金…[全席自由・税込] 一般1,000円 学生800円(当日要学生証提示・枚数制限あり、TIFでのみ取扱)4演目セット券 一般2,000円 学生1,500円 ■チケット発売…1月11日(水) ■チケット取扱…チケットぴあ(Pコード366-203) e+(イープラス)東京国際芸術祭(TIF):03-5961-5202 <http://anj.or.jp> ■お問合せ…東京国際芸術祭(TIF):03-5961-5202 <http://anj.or.jp>

<タイムテーブル>…2月10日(金)~12日(日)

2月10日(金) / 14:30…TIFオープニングスピーチ

15:00…A★ 19:00…B★

2月11日(土) / 12:00…D 14:30…C

17:00…B 19:30…A

2月12日(日) / 12:30C★ 15:00<シンポジウム>

19:00D★

A「メイヘム」 B「アクト・ア・レディ」 C「ペラージオ」 D「セックス・ハビッツ・オブ・アメリカンウイメン」

★…終演後、ポスト・パフォーマンス・トークあり

■会場:にしすがも創造舎特設劇場 ■協力:プレイラッツ・センター ガスリー・シアター ■助成:日米友好基金 Japan-United States Friendship Commission

schedule for JANUARY 2006

神楽坂 die pratz

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

die pratz dance festival「ダンスがみたい! 新人シリーズ4」
■日程/2006年1月10日~2月1日 ■チケット予約/神楽坂die pratz TEL.03-3235-7990(火曜日を除く12:30~17:30) E-mail = pratz@ask.ne.jp HP = <http://www.geocities.jp/azabubu/> ■チケット料金/前売:当日=¥2300(学生¥1800要学生証)フェスティバル通し券=¥5800(学生¥4800要学生証)(1演目につき一回有効、die pratzのみで予約受付) ※通し券をお買い求めのお客様は、「オーディエンス賞」の投票権利があります。■主催/「ダンスが見たい!」実行委員会 ■共催/die pratz 個々のスケジュールについてはp3参照。

— 一般の公演(フェスティバルとは関係ありません) —

1/5(木)~1/8(日) ■ 怒情にかけは動ぬ黒沢美香のソロ・ダンス「薔薇の人-ROLL-」 問=03-3227-0279
☆振付=黒沢美香 ☆出演=黒沢美香 ☆照明=アイカワマサアキ ☆Public Acoustic=椎 啓 ☆衣装=堂本教子 ☆美術=瀬澤潔 ☆アートディレクション=首くり禱象 ☆主催=Dance in Deed! ☆共催=薔薇ノクラブ ◎回る、転がる、巻く、とく回る♪事だけを題材としながらも話題を呼び「薔薇の人-ROLL-」。身体装置ともいへばその衣装・美術をあらたに再々演。黒沢80年代の作品ビデオ上映会同時開催。
1/20(金)~1/22(日) ■ 小指侍
「ロイヤルなハニー」 問=090-9898-9189
narushimake@yahoo.co.jp ☆作・演出=成島秀和 村井雄

小山待子 佐藤美白希 クレハ ウヌマよなな 前川健二 他
◎「あなたのために瞳を万華鏡にしてみました。覗いて頂けませんか?」縦横無尽にうねり狂うミツバチ社会の物語を、灼熱な台詞回しで魅せる野心情。

1/24(火)~1/25(水) ■ 武蔵容子
「武蔵容子ソロダンス 魚の小骨・13本目 一熱と情-」 問=042-572-0396(FAX) ☆作・出演=武蔵容子 ☆照明・音響=曾我傑 ◎骨格のみを作り即興で肉付けしていく長編ソロダンスシリーズの13本目。我が熱情にまかせた身体に小骨がいくつも突き刺さる。「スレハバノ小骨」ソロユニナニクリ。
2/3(金)~2/5(日) ■ 荒野
「灼める日」 問=080-1164-2942 ☆作・演出=藤田朋子
☆出演=富川幸江 平岡美貴 石田裕久 松永有美子 松崎智子 雷時雨 他 ◎父が起した沈没事故から20年。私は未だに沈んでいる。浮びたい! いや浮べない! いつかは浮きたい。だから私は泳いでいる。持参金は1億。有頂天になりたいたい。
2/6(月) & 2/7(火) ■ 中西レモン企画
「うつつと舞 踊の祭典 量半量vol.6」
問=rero2remon@hotmail.com

麻布 die pratz

〒106-0044 港区東麻布1-26-6 2F T&F 03-5545-1385

1/13(金)~1/15(日) ■ Wild Peach the Viking
「圓用紙」 問=090-8025-8978(WPV制作上野) ☆作・演出=永田剛志 ☆出演=永田剛志 松岡洋介 山岡徹 風戸崎三条恵美 ◎Wild Peach the Vikingが第1回公演でお廻りする「圓用紙」。自由に絵が書けなくなってしまった現代社会に捧げる、ココロのお年玉です。
1/20(金)~1/22(日) ■ うるとら2B団

「Tattoo」 問=03-3636-6443(うるとら2B団) ☆作・演出=門間利夫 ☆出演=野崎隆司 ハ乙女真記子 吉沢千尋 大野がく 伊東武志 門間利夫 他 ◎遺子操作により生産され、人間と区別する為に「Tribal Tattoo」を背負う者達。産まれた彼らは自分達の権利を求め立ち上がる。U2BDリアルアクト第2弾!

1/28(土) & 1/29(日) ■ ZaNUKA
「LA PUCELLE~ジャンヌ・ダルクと宴會泥棒」
問=070-5070-9271 ☆作・演出=伊藤さやか ☆出演=塩谷伸一 他 ☆作曲=FISHER KING ☆振付=岡田むつみ ◎ジャンヌ・ダルクの美の兄が、偽者ジャンヌ・ダルクをつけて宴會泥棒をしていた?—そんなトホホな歴史的記録をもとにした、涙と笑いのミュージカル!!

1/30(月) ■ ダンスの犬 ALL IS FULL
「裂けて行く月」 問=047-447-0073 ☆作・演出=深谷正子 ☆出演=岡田隆明 縫部聖治 成田優美子 齋藤道子 玉内集子 ◎5人の作り手場から、複雑にからみ合う齷齪ながつかり合い。動物というキーワードで引き出して行く。「コント」なる空気が「サケメ」へと流れて行く。
2/1(水)~2/5(日) ■ ひげ太夫
「南無トウゴ」 問=090-3503-0108(ひげ太夫)
☆作・演出=吉村よひ ☆出演=吉村よひ 成田みわ子 みそ 田嶋麻子 永井ひとみ 林直子 ◎久々、中華物。南の方角の守り神、南無さま。その姿は乙女、ムジナ、牙の生えた大熊など諸説有り。園の危機を救う、さる勇者が南無さまを訪ねるが…!

TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光蓮ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
<http://www.tinyalice.net> tokyua@tinyalice.ne.jp

1月の公演スケジュールについてはホームページをご覧ください。